エッセイ：フランス・プロヴァンス地方の変容を追う

Essai : La Provence d'hier à aujourd'hui

木下 恵美子

KINOSHITA Emiko

Abstract : Je donne des cours de français depuis un bon moment. Avec une de mes élèves, nous avons fait la traduction en japonais d'un essai de Marcel Pagnol "souvenir d'enfance". Cette dame âgée de quatre-vingt huit ans, que j'ai vivement félicitée pour sa motivation, Elle est très contente de son travail et a publié cette traduction comme un petit livre.

Du temps de Pagnol, la vie en Provence était très simple et les gens aimaient cette région avec ses traditions bien conservées. Aujourd'hui encore, dans la plupart des villages, la vie traditionnelle est préservée. Mais, dans le petit village médiéval de Lacoste avec ses maisons provençales, depuis l'arrivée du couturier Pierre Cardin, il y a des problèmes et de grands changements. Dans quel but a-t-il acheté un tiers du village ?

Cette situation anormale me préoccupe beaucoup.

Keywords : Marcel Pagnol, Provence, Pierre Cardin, Lacoste

マルセル・パニョル、プロヴァンス、ピエール・カルダン、ラコスト

1920年代から頭角を現し活躍したフランスの劇作家、小説家そして映画作家であった Marcel Pagnol (マルセル・パニョル 1895-1974)。今年が生誕 125 年にあたるので、彼が初めて書いた散文「Le Château de ma mère」(お母さんのお城)の中から抜粋した「Souvenir d'enfance」(子供の頃の思い出)を読むことにした。ページをめくっていくと、この機会に日本語に訳してみようという意欲にかられ、時間を見つけては辞書を片手に取り組んだ。文章の奥に秘められた作者の意図を充分理解するのに戸惑いも何度かあったが、何とか最後までやり遂げる事が出来大満足である。

内容は主人公のボクが、子供の頃ヴァカンスを過ごしたプロヴァンス地方が舞台。家族や友達との心理描写が複雑でそれを読み取るのにいささか苦労した。しかし、この思慮深いボクが巻き起こす様々な出来事を通して人間的に成長していく姿には感銘を受けた。2 か月の長いヴァカンスの終わりを迎え、もっとこの田舎家にとどまっていたい子供心。ばれない様に仮病をつかったり、何も食わずに反抗したり、両親を困らせようとするのだが、どんなことがあっても学校には戻らなくてはならない。しかも父親は教員なので新学期の最初の日に欠席することなど出来ないの、家族は家に帰ることになる。それから、学校に戻ったボクや友達の様子や

心の動きが実に細かく書かれている。

さて、パニョルは 1895 年 2 月にマルセイユの近くの小さな村、Aubagne(オバーニュ)で生まれた。幼少の頃、その丘の上にある La Traille(ラ・トレイユ)で家族と毎年ヴァカンスを過ごしていた。休みが終わりに近くなると何とも言いようのない虚無感におそわれる。それをどうにか乗り越えて受験生活と向き合い、10 歳でマルセイユの名門リセ校の奨学金受給試験に合格し入学する。この頃の思い出を 35 ページぐらいの散文で書いてある。

1930 年代のプロヴァンス地方はパリからは程遠い全く離れた別世界であった。その上、訛りの強いフランス語を話すので、意思の疎通をはかるのも容易なことではなかったようだ。パニョルの父は教員、母が裁縫師、そして弟と妹の 5 人家族であった。毎年ラ・トレイユでヴァカンスを過ごし、山に囲まれた大自然の中を友達と駆け巡り、自由を満喫した幸せな日々そのものであった。

パニョルの「子供の頃の思い出」を読んでいると、私の南仏在住時の日々が甦って来て、プロヴァンス地方が身近に感じられるのはとても嬉しい。実は私がパニョルに傾倒したのはモナコに住んでいた時であった。私は La place des Moulins(ムーラン広場)がある通りで暮らしていたが、偶然にもある日、この近くにパニョルが邸宅を構えていたことを知った。La Lestra(ラ・レストラ)と名付けられ、今でも大切に保存されている。子供時代をプロヴァンスの田舎で過ごした彼がなぜ、モナコにと問いかけたくなる。

1950 年代、彼は当時のモナコ大公、レニエ III 世と親しい友人関係にあり、大公の公室とも深い関わりを保っていた。女優であった妻のジャクリヌや子供達と幸せな数年間をここで過ごした。パニョルは既に 1926 年、若くして「ジャズ」と言う劇をオペラ座で公演したが、その後、短い間とは言え、モナコの住まいを足場にして Paris(パリ)まで足を伸ばし活躍をしていた。

今でも、モナコにとってパニョルの存在は歴史の一ページを飾る特別なものである。しかし、1954 年、娘が病死したことから、家族はパリに移り、その後、1974 年にパニョルは 75 才で亡くなった。勿論、彼の遺体はプロヴァンス地方のラ・トレイユの市営墓地に両親と弟、妻と共に埋葬されている。

彼の代表的な映画「ファニ」や「マノンの泉」「マリウス」「セザール」などに私は魅せられて、当時のプロヴァンス地方の暮らしにとっても憧れの気持ちを抱いていた。古い伝統などを大切に守り続け、そこに生きる価値観を見出して、自分なりの生活を営む人達が今でも多い。村の広場には毎日朝市が立ち、カフェなどでエスプレソを飲みながら一日が始まる。お昼になればアペリティフのパステイスで喉を潤し、近所の人々が集まりペタンクに興じたり、何とものどかな日々の暮らしである。

映画製作に挑んだパニョルは 1941 年にシャトーをこの辺りに買い、ここを基盤に活動しようとしたが、戦争のためにその計画は実現しなかった。しかし、彼は今でもプロヴァンスの魂と言われ、その存在はこの地の人々の心に深く浸透している。映画作家として初めて、名誉あるアカデミー・フランセーズ会員として選ばれたのも大きな誇りであった。

そのパニョルのゆかりの地、プロヴァンス地方と言えば、それぞれの村一面に広がるラヴェンダー畑がすぐに思い浮かぶ。紫色のじゅうたんが敷き詰められ心癒される香りに、普段の暮らしから解放されるひと時に出会える。真夏の蟬の鳴き声もジーンと心にしみる感じがする。この地方では蟬は幸運のシンボルとしての身近な存在であり、暮らしのお守りのような親近感さえ抱かせるものである。

オリーブ畑もこの地域には欠かせない風景で、オリーブの栽培がとても盛んである。百年以上も同じ場所に居座っているオリーブの木々にも小さな実がなり、人々の生活をどれ程豊かにしていることか計り知れない程だ。

また、プラタナスの並木沿いに立つ朝市は人々の日常生活にしっかり根付いている。野菜や果物をはじめ、チーズ、肉、ハム類など地元の新鮮な食べ物で溢れている。ここに集まる村人達と生産者の何気ない会話を通して心もつながり、毎日の暮らしに喜びと活気を与えているのだ。

それから、プロヴァンス地方をこよなく愛した画家達の事も忘れてはならない。セザンヌ、ゴッホ、マチス、ルノアールなどの足跡があちこちに残されている。18 kmに及ぶサント・ヴィクトワールの石灰岩の白い山塊、1904 年それを描いたセザンヌが人生の最後をここで送った。既に古代ローマ人が目をつけた Arles(アルル)の村には、ゴッホの魂が潜んでいて彼が 1886 年に描いた跳ね橋が、今でも当時の様子を伝えている。彼も晩年をこの地方で暮らし精神の病に苦しみ、このあたりの修道院のとなりの病院で自分と闘っていた。これら多くのアーティストを捉えた背景には、この地方の風土と昔から変わらない人々の暮らしへの愛着があるからではないかと思う。紺碧な空、まばゆい光、風や空気にも色があり、それを取り巻く風景にパレットを開き絵筆を握りたくなる魅力が溢れている。

プロヴァンス地方には、切りたった崖などにつくられた通称「鷲ノ巣村」、villages perchés (ヴィラーージュ・ペルシェ) と呼ばれる小さな村が点在している。特に、le Luberon (ル・ルベロン) にはまだ多く残っている。だが、住民の高齢化と共に、不便な暮らしを強いられているこの地からやむを得ず離れて行く人も日々増えている。

その様な状況を巧みにコマーシャル化した Pierre Cardin (ピエール・カルダン) について少し書いてみたい。事の発端は中世の歴史を残す Lacoste (ラコスト) という小さな村に、彼が 20 年前にある侯爵 SADE (サド) のシャトーを買い求めたことから始まる。崩れかけたさほど大

きくはない石造りの館を改修し、そこを自分の憩いの場としていた。その後、シャトーから見下ろす村の魅力にとりつかれたカルダンは古くからのこの地の住民を説得し、プロヴァンス風の家を1軒、2軒、3軒と買い求め50軒近く、つまりこの村の三分の一を自分のものにしていったのだ。しかも、毎日の暮らしに欠かせないパンの店や雑貨屋なども買収された。その上、10ヘクタール余りの農地をも買い占め、それが何も手つかずにそのまま放置されているのだ。このカルダンの支配力により、村の日常の暮らしは絶滅してしまったと言っても過言ではない。

お金に惑わされて自分の生まれ育った家を手放し、村を離れていく人々の姿を見るにつけ心が痛む。頑固に居座る古くからの住民達の気持ちは傷つき、通りには人影もなく小さな店なども当然生き残れず閑散とした村となった。以前は家族一緒に賑やかに過ごし、子供達も幸せだったし活気に満ち溢れていたのだ。今となっては、すたれて変わりゆく様子に喉が詰まる思いだと住民は話す。ヴァカンスの間はそれでも少しは村も生きている感じがしたが、8月の終わりになるとまるでお墓同然、村は死んでしまった。もうどうするすべもない。

カルダンは村の再生のために、電気や水道の公共設備の修復、博物館や展示場を作ったりなど巨額の投資をした。それなのに、どうして村人達は自分に対抗するばかりで喜んでくれないのか理解出来ないし不愉快だと述べる。反面、家を売却した人々は思いがけない程の札束を手にして幸運を掴んだと喜んでいっているのだ。お金に目がくらみ古くからのプロヴァンス人の気質や誇りはどこへ行ってしまったのだろうか。

ラコストはお化け村と呼ばれることになってしまいそうで何とも情けない。胸が張り裂ける思いで過ごす残された住民。カルダンが買い取った家々は、今風の新しい感じできれいに修復はされたが、人が住まない空き家のままだ。時にはフェスティバル、音楽祭、おおがかりなカルダンデザインの家具などの展示会、芸術家達の集いの場として催され使われているが、それがどこまで村の復興につながっていくのだろうか。村長は村の繁栄を信じていると意気込んでいるが、逆に住民の不安な気持ちはますます募るばかりだ。だが、村の経済復興のことを考えればカルダンの事業によって、労働者の雇用にもおおいにプラスになっているのは事実である。彼はこの村に活気を与え新しい姿のプロヴァンスを生み出そうとしていると評価する人も少なくない。

今迄の様に毎朝、焼き立てのバゲットを買いに行ったり、カフェで近隣の人達とおしゃべりを楽しむ習慣はここで断ち切られてしまった。カルダンの話は聞きたくないと怒りをあらわにする村人達は、これからどんな気持ちで生きていくのだろうか。時間が経てば村の変容も受け入れられていくのかと思いながら、プロヴァンスらしい中世の小さな村とピエール・カルダンの新構想がどうしても結びつかず、心淋しい限りである。何年後かにラコスト村を訪ねて、この変容の様子を自分の目で確かめてみたいと思う反面、大好きなプロヴァンス地方への私の想いが崩れてしまうのではないかと、とても不安でやりきれない気持ちが交錯しているこの頃である。

追記：このエッセイは2020年10月に書いたものです。この中にラコスト村とピエール・カルダンについての内容があります。しかし、2020年12月29日、ピエール・カルダンは98才の生涯を閉じました。